

展示品一覧

○ 大図（東京湾岸）

「初図 自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第一、自江戸至奥州沿海図第一、奥州街道図第一、越後街道図第一」

国宝：地図・絵図類 番号14、縮尺36,000分の1、175×167cm

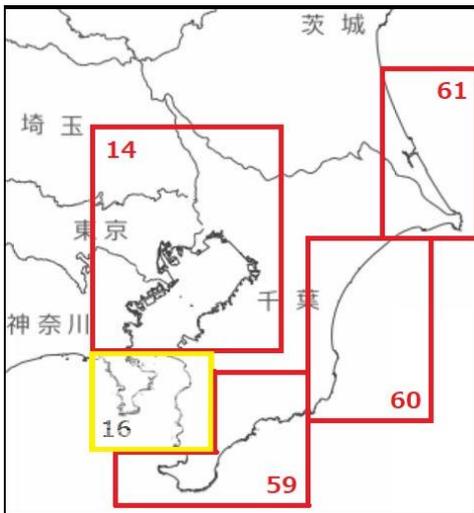
文化元年(1801)に上呈された日本東半部沿海地図大図六十九舗の初図で、第四次測量の江戸から藤沢(神奈川県)までの東海道、第二次測量の江戸から田浦(神奈川県横須賀市)までと江戸から大堀(千葉県富津市)までの海岸線、第一～三次測量の江戸から草加(埼玉県草加市)までの奥州街道、第三次測量の江戸から蕨(埼玉県)までの中山道(越後街道)を描いた四図を一冊にまとめたものである。

享和元年六月六日の測量日記に、品川から「町々量程車にて測量、八ッ頃に深川隠宅に着」とあるように、初めて量程車が使用されたのは江戸市中であった。「高輪」「大木戸」「日本橋」「永代橋」「深川黒江町」等の地名が読み取れる。そのためには最短合焦距離の短いオペラグラスが不可欠であるが。

川崎から大師河原の測量を平山郡蔵、宗平兄弟と伊能秀蔵が手分けして行なった際に、村々からの案内がなかったために、「雨天闇夜に難儀させしは後々までも遺恨なりし」と測量日記(享和元年四月四日)に書くことになった。大図の川崎から羽田村の辺りは多摩川の三角州であることが分る描画である。

七月二日付の高橋至時の忠敬宛書簡(国宝書状類270、『天文暦学諸家書簡集』21)では、中川の先がススキや小竹の原で、測量に手間取って行徳に泊まったとのこと、難渋の程を察しますとねぎらっている。量程車については、土地の乾湿によっても差が出るので、間棹や間縄も使って比べていると忠敬は報告したようである。また至時からは、今回は地上1度の里数を精密に測る大切な測量と鼓舞する言葉も記されている。

「初図」江戸から川崎



国宝地図・絵図類の14、59、60、61を展示



『忠敬と伊能図』より

○ 大図（千葉県南部 安房）

「自江戸至奥州沿海図 第三〈自吉浜／至御宿〉」 国宝：地図・絵図類 番号59、縮尺36,000分の1
第二次測量の享和元年六月二十八日に吉浜村（千葉県安房郡鋸南町）から館山、鴨川、勝浦をへて御宿までの測量成果である。外房の海岸線は断崖絶壁が多い。七月十日の測量日記は、小湊の誕生寺では「喫茶を進れども、海岸の潮間を急ぎ、立寄らず」とある。下のグーグルアース3Dを見ても、引潮の時間帯以外は海岸線測量は無理そうである。

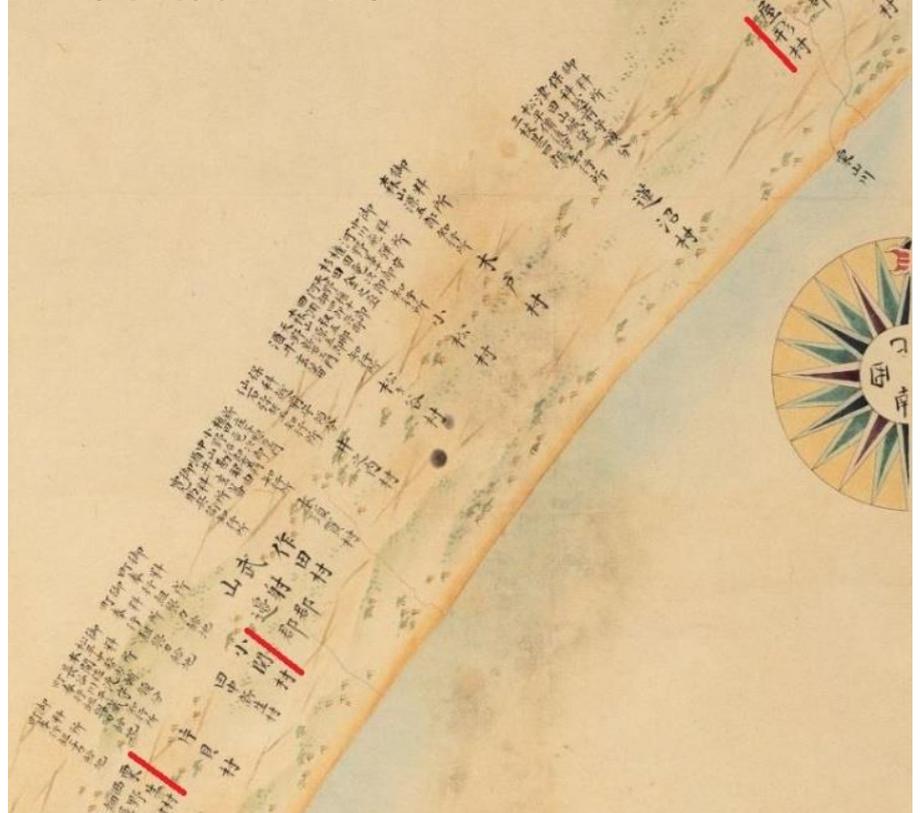


大図（千葉県 九十九里浜）

「自江戸至奥州沿海図 第四〈自御宿／至井戸野〉」 国宝：地図・絵図類 番号60、縮尺36,000分の1
外房の険しい海岸線も、大東岬を過ぎると様相が一変して九十九里浜となる。全長六十六Kmにわたって砂浜が続く。第二次測量の享和元年七月十五日の測量日記には「霧深して方位尺取らず。… 細屋敷村、西野村。それより栗生村、片貝村、田中新生村、小関村。」と集落名を淡々と羅列している。しかし、実際には栗生村（千葉県九十九里町）では莫逆の友である飯高惣兵衛を訪れている。飯高惣兵衛と彼が忠敬に贈った漢詩については「会報」第20号の木島里八「測量中の伊能忠敬に贈った飯高惣兵衛の漢詩について」に詳しい。小関村（九十九里町）は忠敬の出生の地であり、『伊能忠敬記念公園』として整備されている。

翌十六日の測量日記には「屋形村午前に着。止宿名主海保兵右衛門。此所より同郡小堤村へ立寄」とある。小堤（横芝光町）は忠敬が10歳から17歳まで生活した場所である。父貞恒の実家神保利左衛門家に「伊能忠敬成長の処」、貞恒の建てた分家神保理左衛門家に「伊能忠敬の父貞恒生活の処」という記念碑が建っている。なお、海保兵右衛門や伊能三郎右衛門家を継いだ伊能源六については、「会報」65号の海保英之「伊能三郎右衛門家を再興した伊能源六景文と海保家について」に詳しい。

国会図書館デジタルコレクション
大日本沿海輿地全図 第89図



○ 大図（千葉県旭市から茨城県銚田市 九十九里浜・銚子・鹿島灘海岸）

「自江戸至奥州沿海図 第五〈自井戸野／至滝浜〉」 国宝：地図・絵図類 番号61、縮尺36,000分の1

七月十七日の測量日記は「井戸野村に着。止宿名主庄左衛門」とあるが、忠敬だけは隊員とは別に「太田村、加瀬左兵衛方に泊」と単独行動である。太田村の加瀬家は、忠敬の次女の篠の嫁ぎ先であり、篠の没後も交流が続いていた。「会報」82号の戸村茂昭「忠敬次女篠女の嫁ぎ先」は加瀬家の探訪記である。



十八日、忠敬が銚子に到着し、翌日には、嫡男の景敬や伊能一族、親友の久保木清淵らが見舞いにかけてつけた。銚子では九日間をかけて富士山の方位測定に挑んだ。測量日記には「日々濛気おおくして見えざりき、此朝富士山を測得たり。そのよろこび知るべし」とある。

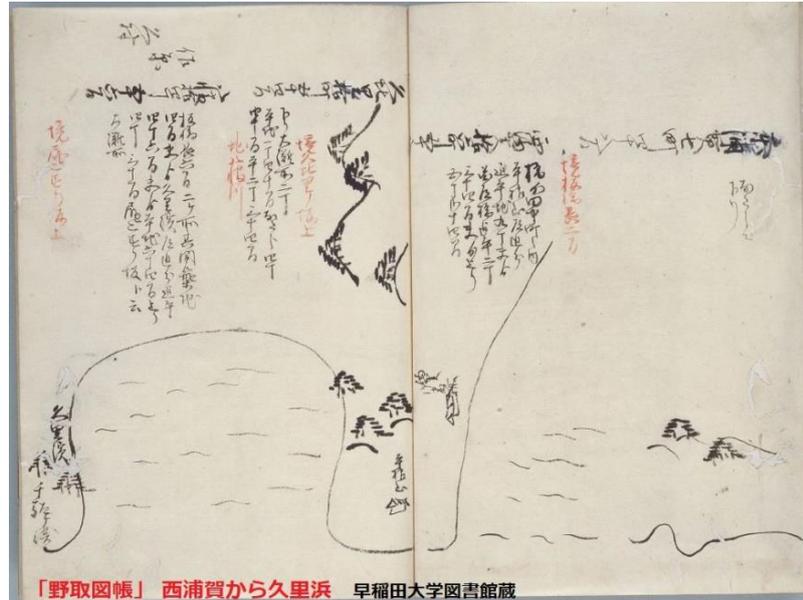
地図は忠敬が作成した日本地図の写しの「日本図」(カナ書特別小図)で、高橋景保が部下に作成を命じ、シーボルトに渡したものだ。香取市佐原地区の住民は、日頃から伊能図に「佐原」の記載がないことを遺憾に思っている。そこで、このシーボルト事件で名高い「カナ書特別小図」には、「サワラ」「カトリ」が明記されていることを紹介したい。

○ 「測量日記」(久保木清淵に地図の下書きを依頼)

「享和元辛酉歳沿海日記」 国宝：文書記録類 番号71

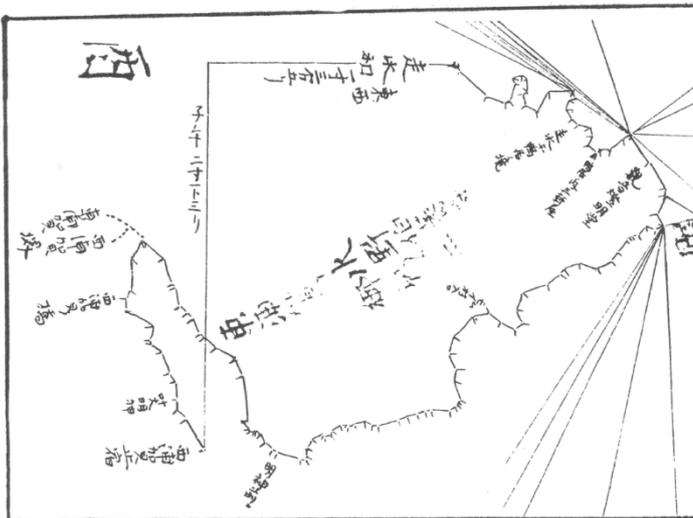
銚子測量中のエピソードとして、享和元年七月二十四日の「津宮久保木太郎右衛門(清淵)、武州、相州、豆州、両総州、房州の海辺地図の下書を頼置」という記事を紹介している。「地図の下書」とはどのようなことを意味するのだろうか。

野帳の測量一次データから下図を作成することか、下図に細筆で地名を書き込むことか、忠敬描くところの「野取図帳」を大図に反映させることか、具体的に知りたいところである。「野取図帳」については会報78号前田幸子「伊能忠敬自筆野取図帳」に詳しい。



下図断簡「自東横須賀至西浦賀止宿下図」

香取市立伊能忠敬記念館蔵



○ 下図（愛媛県八幡浜市から伊方町 佐多岬半島沿岸）

「自伊予国喜多郡出海浦至伊予国宇和郡周木浦下図」

国宝：地図・絵図類 番号358、縮尺36,000分の1、94.5×160.1cm

この下図は、第六次四国・大和路測量の途中、文化五年七月四日に周木浦（西予市）を出立して、二十四日に出海村（大洲市）までを測量した成果である。七月六日と七日は八幡浜の庄屋の浅井万兵衛に連泊した。測量日記では「大家なり、家作も宜、酒造、網も二張りするよし」としている。測量隊員の柴山傳左衛門の旅中日記によると、伊能忠敬は奥座敷に、芝山たち四人は表座敷をあてがわれた。表座敷は上の間が8畳、次の間が十五畳で、周囲に一間の畳廊下がつき、二間の床の間があるという。「座敷の数の多き事、大牀江戸の三、四千石取」の大神旗本クラスであると記している。翌七日は絵図仕立のため柴山は休みとなった。「今日七夕の処、幸いに、当所泊りに付き、一日の休息にて、殊のほか手広なれば、旅中ながら、少しは節句の心持ちあり。当所え泊りあわせしは、時に望みての幸いと云えし」と感慨を記している。



○ 下図（愛媛県松山市から西条市 高縄半島沿岸）

「自伊予国和氣郡堀江村至伊予国新居郡船屋村下図」

国宝：地図・絵図類 番号358、縮尺36,000分の1、92.1×157.6cm

佐多岬半島測量を終えた測量隊は大洲城下をへて、松山沖の島々の測量に向った。八月五日に忠敬は某TV番組で有名になった百合(由利)嶋一周を測っている。「会報」16号の伊藤栄子「愛媛県温泉郡中島町の町史資料より」には大洲藩と松山藩の領有権争いに巻き込まれた忠敬の対応が記されている。十五日の午前中には道後温泉に到着した。柴山傳左衛門の旅中日記には一ノ湯は「留湯」なので「此方計り勝手次第、壺日幾度も入ル」という温泉三昧を満喫した。翌日の測量日記には「朝より雨、逗留、地図」とある。道後温泉で恵みの雨である。

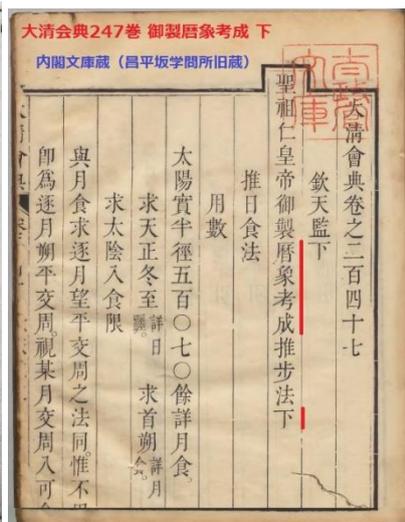
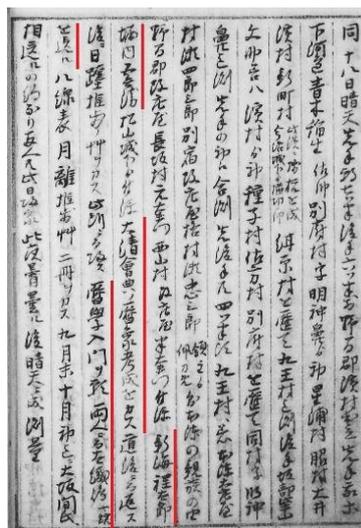


この下図は、十六日に道後温泉を出立して堀江村（松山市）の残杭から測量を始めて、二十九日に船屋村（西条市）までを測量した成果である。西条城下では世話人の松神子村の庄屋の和忠次等が出迎えた。西条藩領では松神子村文書など各村々の受入れ関係の村方文書が多く残っている。「会報」77～79号では久門家文書が紹介されている。

○ 「測量日記」(愛媛県で暦学入門志願者登場)

「戊辰沿海日記 下」 国宝：文書記録類 番号80

伊予測量中のエピソードとして、文化五年八月十八日の記事を紹介している。松山から付き添ってきた新海程太郎と堀内五兵衛は忠敬から「大清会典の暦象考成」などを借りたりしている。国宝典籍類359の「大清会典暦象考成」であろうか。そして、この日二人は「暦学入門を願。兩人にて太織島(縞)一端(反)を送る」ことになった。



○ 「暦象考成 下編」 国宝：典籍類 番号13

日本の西洋天文学の受容は、中国経由であった。マテオ・リッチ以来、イエズス会宣教師達は中国布教の一手段として西洋科学技術書を漢訳し紹介してきた。アダム・シャル（漢名：湯若望）らが西洋の暦法を漢文に訳し、明朝最後の皇帝崇禎帝の献じたのが「崇禎暦書」である。これを清朝の康熙帝の時代に何国宗・梅穀成らが編纂し直したのが「暦象考成」の上・下であり、上編は主にティコ・ブラーエの天文学理論、下編は実際の計算方法を述べている。麻田派暦学者の重要な教科書であった。